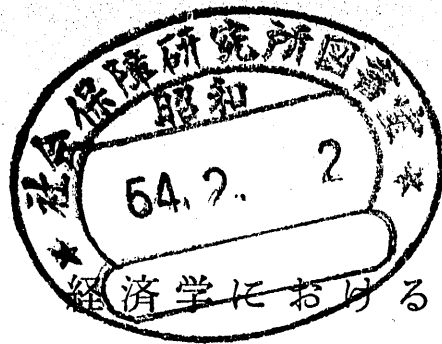




経済学における人間復位

江 見 康 一

ある新聞に「やさしい経済学」という表題の連載が何年も前から続いている。そこで何人かの人に、それがやさしいかどうかを聞いてみると、多くの場合、ちっともやさしくない、という答えが返ってくる。それは経済学という学問が本来精緻な理論で組み立てられていて、やさしく噛みくだこうとしてもそれには限度があり、読者が一定のレベルにまで達してくれないと、なかなか理解してもらえない、ということなのだろうか。もちろんそういう要素もあると思う。

しかしそれだけではあるまい。経済学の専門雑誌に書くのではなく、日刊誌に発表するのであれば、対象となる読者層を念頭において表現を練る必要があるだろう。それは単に複雑な数式を単純化して示すとか、数式をできるだけ言葉に置き換えて表現するとか、ということだけではない。トピックスの選び方、理論と実際とのつながり、適当な事例の示し方などを含めて、読者の関心を引き出す努力が大切だと思う。「やさしい」ということは、知的に理解できることと現実的基盤とが結びついているということでもあるからだ。もちろん文章の上手下手ということもある。経済学が数式の操作に傾くようになってから、説明力を数式そのものにおんぶしてしまい、文章に研ぎをかけるという努力を怠ってきているのではないか、という面もある。

もともとそのような数式の体系は、複雑な経済現象の観察から出発して、その中から枝葉末節な部分を切り落とし、本質的な諸関係を取り出して、それを整理したものといえる。もちろんこのような本質的部分を見つけるためには透徹した洞察力と卓抜な抽象力とが求められるであろう。理論経済学者の役割がそれであり、多くの人が好んで使うフレーム・ワークというのはそのようにして求められた経済の基本的枠組みのことである。

しかしこの枠組みは、人間の身体をレントゲン写真で映して見出される骨格構造のようなものであるから、その構造が明らかになったからといって、有機体としての人間がわかったことにはならない。“生きた”人間を理解するためには、その骨格に肉付けをし、それに血を通わせて、ふたたびもとの人間に戻すという復元作業が必要なのである。ところがその復元作業の努力を怠ってフレーム・ワークの段階で止まっていると、生きた人間とは遠ざかった抽象次元での考察に終わってしまう。経済学者の話が“やさしくない”というのは、そのためではないかと思う。フレーム・ワークの次元での話だと、どうしても仲間同士にしか通じないテクニカルなターム（専門技術的な用語）での説明になってしまう。ところがこのことがいつしか習い性となって、一般の人々を対象とする時でも、同じタームで理解されるという錯覚に陥ってしまうのではないかと思う。もちろん理論家としては、そのような現実問題への適用をするのは経済政策学者で、それは理論家の役割ではないと考えているかもしれない。しかしながら経済学のトータルな役割としては、もちろん「人間の学」としてのそれではなければならないのである。

筆者が以上のようなことをとくに痛感したのは、老人問題に関してブームを巻起した有吉佐和子の『恍惚の人』が出た時であった。老人問題はもちろんそれ以前から叫ばれていたのがあったが、社会保障学者が千言万語を費やしても容易に世論を湧き上がらせることができなかったことが、上記の小説によって老人問題に一気に火がつき、それが大きな警鐘となって振がったという事実である。それは文学とか小説というものが、人間の感性を動かす訴求力において経済学の遠く及ばない強いものを持っているからである。理論は知識としては理解されても、人間の心情をゆり動かすものとしての浸透力が弱い。これはフレーム・ワークの次元であって、血の通った人間の言葉にまでつながっていないからである。もちろん文学と経済学を直接的に比較すること自体無理な話かもしれないが、経済学が人間復位の学として再生しなければならないという志向については、最近における健康と福祉、資源と環境の経済分析において強く実感しているところである。

経済学について述べたのと同様の立場から、医学についても一言しておかねばならない。経済学と医学は、そのルーツをたどればそのいずれもが“生命の再生産”にかかわりをもつという点で共通の基盤をもっている。医学が生命現象を直接扱うのに対して、経済学は生命の糧の再生産を取り扱う。生命現象である以上、有機体としての人間を扱うわけだ。しかるに医学の専門分化が進むにつれて、それが臓器別に分化し、日本医学会の分科会は今や約70にもものぼっている。そのような細分化は、医学の進歩、医学の高度化からくる必然的な成行きであったかもしれないが、しかし人間としての患者の立場からすれば、患部は有機体の一部であって、その部位だけを他の部位から切り離してまったく独立に診断することはむずかしいのではないかと考える。臓器別の専門的診断を総合してこそトータルな人間としての診断が求められるのではないかと。そしてトータルな人間として診断しようとする志向の中で、医学は経済学における人間復位とも結びつくのではないかと、考える。